

## お茶大生協と私の大学生活 —学生時代～定年後の大学院 結果として大学生協—

仲 田 秀\*

卒業生の仲田でございます。学生時代から定年退職まで、大学生協だけで通した仲田です。退職後はお世話になった住民生活（生活道路拡幅のお困り相談、9条の会）を主軸として大学院に進み活動してきました。20年かかってやっと『大学生協の持続的発展について：大学生協における理事会のリーダーシップと経營業績』（東大生協ざくろ会発行、2020年）という論文集を発行でき、各図書館に寄贈することができました。今日のテーマに答えて、コロナで経営が落ち込んでいる大学生協に、その価値を見つけ出してほしいと考え、お話しようと思います。

### 生協設立のころ

コロナ禍の直前に改装したという立派なお茶大生協は、設立したときは小さな15坪以下の自治会室の半分を仕切ってお店にしました。私は、お茶大生協の設立した年、1959（昭和34）年に入学し、入学と同時に生協設立の準備委員になりました。ちょうど60年安保の時で自治会の自主・民主とか民主運営とかに燃えていた時代です。クラスごとに自治委員と生協準備委員を選ぶことになっていました。高校時代には山登りに夢中だったので、自治会はちょっと避けて、地味と思える生協準備委員に手をあげました。戦後の大学生協はこの時まで主要大学にしか存在せず、1957年以降、一県一大学やお茶大のような小規模の大学の設立運動

がおこってきます。この時期に埼玉大とか教育大<sup>1</sup>などが設立しています。

入学が1959年の春ですから、すでに学生自治会は何度か学生大会を開いて生協の設立許可の大学交渉を繰り返していました。準備委員会は最終段階だったので、「生協を私たちの手で」という広報紙を出して靴下の共同購入などをして、自治会とは独立した活動をしていました。この時期、狭いキャンパスに、パン・ミルクの売店と、文房具と教科書を売る店、一番奥の山の上に食堂と、経営が異なる3店舗がありました。それに対して10円牛乳や文房具を買える自分たちで経営する生協の設立を求めて大学に要望し、交渉していました。大学がなかなか承認してくれないので、自治会室を区切って、4月にはお店を実力行使で開いていたように思います。詳しくは、お茶大図書館にある『而立』という生協の30年史をご覧ください<sup>2</sup>。クラスから選出された準備委員は、クラスと準備委員会とをつないでいました。

大学事務局や先生方の心配は20歳前後の女の子達にいくら小さくても店の経営ができるのかということと、東大生協から応援に来ているようだが、運動資金に使われてしまうのではないかなどでした。それに対して、業者に任せるのではなく、自分たちのために、自分たちにわかるように、自分たちで運営したいのだ、それが大学生協なのだとして設立を認めて貰いました。お茶大生協の設立運動は58年から59年の社会的機運の中で、学生大会、クラス討論、お店の実際運営などの大学交渉であり、59年に都庁の認可がおりて、登記

\* 1965年 お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒業

をして誕生します。

設立してからは理事に選出されていますから、必要な時にはお店を開き、隣の建物の割烹着姿の桜蔭会のおばさまたちと顔を合わせながらパンや牛乳を売ることもありました。理事会では教職員理事と対等に議論することを求められました。お茶大の先輩である専従理事は、口数の少ない方でしたが、私が専務の時代（1.5年）、私が考えて決めたことをほとんど認めてくれました。山岳部の山行と生協の用事がぶつからないように組み立てていましたが、よほどのことがない限りストップをかけることなく、肯定して貰えました。

## 生協食堂開設へ

生協食堂の開設はみんなの夢でした<sup>3</sup>。1964年の12月までは食堂設備の改善、生協移管について大学に要求書を提出するなどの、こつこつした要請活動をしていました。ところが、大学当局は生協を外郭団体と位置付けて学生大会決議をあげてもグズグズと進みません。そこで64年の12月に食内容の分析を知らせてクラス討論をし、これではおかしいと学生たちがクラス討論をしながら、食堂利用ボイコットをどんどん進めていきました。学生大会、教授会合意などの半年間、64年の12月から65年の7月までかかりましたが、この運動によって、評議会で最後に学生部長だけの反対でやっと決定しました。東大生協の援助を受けた用意周到な準備と、全学的な業者食堂ボイコット運動と、交渉、この3つが基本になっています。栄養価の高いものを食べたい、学生の要求を聞いてほしいという業者食堂ボイコット運動によって、大学の教授会・評議会の合意を得て、文部省攻勢を跳ね返したのです。1965年9月、生協食堂は開店しました。以上がお茶大生協で私が関わってきた生協運動の特徴的部分の一つです。

以後、68年9月いっぱいまでの3年1か月は、お茶大生協専従トップとして、当時2億円前後の供

給規模の小さな大学生協事業を責任を持って担い、奮闘しました。この中で2年間は事業のことと労使関係に追われて学生理事に余裕を持って接することができませんでしたが、3年目に初めて10人近い新入学生委員1年生を迎えて、のびのびと自主的に活動する場をサポートすることができました。それが得られて初めて、一番大きな東大生協の組織委員会の活動のサポート、その後の連合会の教職員活動のサポートをすることができたのだと思います。正面から取り組んでやりきることで

## お茶大から得られたもの

自分がお茶大から得られたものをちょっと語ります。

一つは自分で考えることです。このことは、お茶大生協の日常運営、特に理事会運営の中で、教職員理事の方々に繰り返し強調されました。殊に、初代理事長の市古宙三先生からは、員外理事である東大生協の理事さんの説明に対して、「君たちはどう考えるの?」と厳しい目つきでたゞされしました。市古理事長は、予算作成の合宿にも泊まり込みで付き合ってくださいました。

次は、協同すること、協同することが持つ力の大切さです。このことは協同行動の一つの例に過ぎませんが、食堂を生協に移管しても、設備が貧困で、回転釜が燃えたことがあります。困ったときには組合員に聞くということ、するとクラス討論の中から、文部省の概算要求で順位を上の方に上げてもらうために、リボンを胸につけて一緒に行動したらどうだろうかという意見が出てきました。このリボン闘争が広がり、学生部との交渉はかどりました。

学ぶこと、つなぐことの豊かさは、大学の授業だけでなく、消費者運動の会合などで思わぬ学びが広がりました。そこでのつながりが思わぬ力となりました。何より小さなお茶大生協から出かけ

でも、対等に民主的に扱って意見を戦わせながら学べることがありがたかったと思います。

そして、選択の自由と決断を学びました。このことは一年～三年生で向き合うことになりました。ちょっとした決断を、正面から向かうか、成り行きで選ぶか？どちらでも、真剣にやれば選んだ道は開けるのだということです。私はちょっと、斜めに選んだわけですけど。また、大きな壁にぶつかった時、思い切り凹んだらまた別の道を歩いてみて、新しい学びにぶつかると、また楽しいのではないかと思います。これは転部転科の時学んだことです。

最終的にわたくしがお茶大で学んだことは、その後の人生の土台でした。まさに協同組合の醍醐味をお茶大時代に学ばせてもらい、その後の生き方に充分生かして、今、80代の市民として、市政にも正面から向き合い行動して、青春を謳歌しています。

ご清聴ありがとうございました。

#### 注

- 1 東京教育大学（現・筑波大学）。
- 2 お茶の水女子大学消費生活協同組合30周年記念誌編集委員会『而立』お茶の水女子大学消費生活協同組合理事会 1992年。
- 3 1946年、学生食堂に対する食糧の特別配給を受けるため、都内の大学を中心に財団法人学生食堂連合会が組織され、1949年にその食堂運営部門が学校福祉協会として独立、お茶大を含む大学食堂の運営を行っていた。しかし学生からは値段の高さや栄養価の低さに対する不満が高まり、また長崎大学や埼玉大学などでは、生協設立運動や既存の生協活動を規制するために大学側が食堂運営に学校福祉協会を導入し、文部省も学生側に圧力をかけているとして、学生が反対運動を展開していた（「大学食堂にあらわれる福祉協会—文部省の生協とりつぶし政策に対決しよう—」全国大学生協連合会機関誌『学協運動』8号、1959年）。